



シリーズ！ 活躍する2018年度日本ITU協会賞奨励賞受賞者 その6

ねぎし あきら
根岸 聡

日本放送協会 国際放送局 国際企画部 副部長
negishi.a-ky@nhk.or.jp
<https://www3.nhk.or.jp/nhkworld/ja/>



地デジ導入方法に関するITUハンドブックの取りまとめに大きく貢献したほか、4K・8Kを衛星放送で伝送する方式であるISDB-S3に関する勧告・レポートの策定に寄与する等、幅広い視点からITUの標準化活動に貢献。今後も我が国の周波数共用検討を技術的観点から主導するとともに、世界放送技術の先導が期待される。

ITU-R活動での経験

この度は、日本ITU協会賞奨励賞を頂きまして誠にありがとうございます。日本ITU協会の皆様及び関係者の皆様へ、厚く御礼申し上げます。

私が最初にITU-Rの活動に参加したのは、2015年7月のSG6（放送業務）ブロック会合でした。地上デジタル放送と他業務の周波数共用検討・干渉評価用のパラメータに関するレポートや、緊急警報放送に関する勧告の策定に携わりました。

その後、WRC-15（世界無線通信会議）へ向けた最後のアジア・オセアニア準備会合に参加しました。同会合では、IMT（携帯電話）の新たな周波数分配の検討やEESS（地球探査衛星）への追加周波数割当の検討において、放送関連業務が適切に保護されるよう対処しました。過去に国際会議の経験はあったものの、放送業界代表として、更には日本代表として参加した重みは格別でした。

同年11月には、ITU-Rの活動に関わり始めて5か月にしてWRC-15に参加しました。4週間にも及ぶ同会合は、各国や各業界の思惑が複雑に交錯し、周波数割当の世界調和を成立させることの難しさを学ぶ貴重な機会となりました。

2016年にはSG4（衛星業務）にて、UHDTV衛星伝送方式に関するシステム勧告である勧告ITU-R BO.2098の策定に携わりました。2018年12月よりサービスを開始した4K・8K衛星放送の伝送方式であるISDB-S3の国際標準化が目的でした。DVB代表団をはじめとする多くの方々に協力いただき、同勧告は無事2016年12月に発行されました。また、地デジ導入に関するITU-Rハンドブックの作成にも携わりました。今後、地デジ移行を実施していく国に参照してもらうことを目的とし、日本の有益な情報を多分に掲載しました。

2017年に私は別の部署へ異動となり、私のITU-R活動は一旦幕を閉じました。その間の経験は非常に貴重なものとなり、現在担当している「放送で日本を海外へ発信する」という業務にも大きく役立っています。短い期間ではありましたが、微力ながらITU-Rの活動に寄与できたことを光栄に感じております。今後も別の形で、日本が世界の放送技術を牽引し、業界全体を発展させていく一役を担っていただければと思います。



はらだ けい
原田 恵

日本電信電話株式会社 未来ねっと研究所 研究員
kei.harada.by@hco.ntt.co.jp
<http://www.ntt.co.jp/>



oneM2Mにおいて、OMAのGotAPIのヘルスケアデバイスの情報モデルとoneM2MのIoTデバイスの情報モデルのマッピング仕様を完成し、モバイルを活用したヘルスケアサービス実現に向けた標準化に貢献。今後も引き続き、さらなるIoTの発展に寄与することが期待される。

oneM2Mにおける初めての標準化業務

この度は、日本ITU協会賞奨励賞を賜り大変ありがとうございます。この受賞は、技術的知識から標準化業務の心構えまでご教示くださった関係者の方々のお力添えによるものです。この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

2013年に日本電信電話株式会社に入社した当時は、ブレイン・マシン・インタフェース（BMI）関連の国プロに携わり、簡易脳波計をはじめとしたヘルスケアデバイスを実験で使用してきました。その後、IoTサービス基盤の研究開発チームに配属され、国際標準を活用した効率的な開発のため、2016年からoneM2Mの標準化担当となりました。そして一番初めに取り組んだ課題が、本受賞対象である、OMA GotAPIとoneM2Mの情報モデルマッピングの仕様化でした。

現在は、この経験から得た情報モデルマッピングの知見を活かして、oneM2Mの相互接続性を高める仕様を継続的に提案し、oneM2Mユーザが享受するメリットを増やしています。また、2018年5月～2019年1月にはoneM2M仕様のバージョン差を文書化するWork Itemのラポータを務め、oneM2M導入へのハードルを下げることでoneM2Mの普及促進に取り組みました。

oneM2Mは、水平統合型IoTサービスプラットフォームのデジュール標準策定を目指して、ETSI M2Mを母体として2012年に設立された、パートナーシッププロジェクトです。2015年に仕様の初版が、2018年12月には第3版が発行され、

仕様の成熟度は高まっており、oneM2M準拠プラットフォームを用いたパイロットプロジェクトも韓国・フランス・ドイツを中心に展開しています。

このような背景を持つoneM2Mは、私にとって初めての標準化活動の場所です。会議に参加し始めた頃は、会議でのマナーどころか、英語でのコミュニケーションのマナーすら理解していなかったため、交渉や議論が満足に行えませんでした。ですが、アットホームなoneM2Mメンバのおかげで、様々なマナーや立ち居振る舞いの理解が進み、最低限の業務は行えるようになりました。

会議でのマナーとして学んだことは、参加姿勢を前面に出すことです。会議場においても、ずっと下を向いてパソコン作業をしている人は、議長席や発表者席からは悪目立ちし、良い印象は受けません。議長がそのことに対して苦言を呈したこともありましたが、国内と違い、「何もしない」ということが失礼にあたる文化もあるということを実感しました。ですが、発言者を見て、議論に関心がある姿勢を見れば、少なくとも失礼にはなりません。また、発言者とアイコンタクトが取れるため、その場で些細な意見や質問もしやすくなるとともに、顔と名前を覚えてもらえます。

今後は、このようなマナーを心がけて国内外のメンバと良好な関係を築きながら、oneM2Mの相互接続性の向上並びに普及促進に尽力してまいります。